

大正末期の三名の朱房行司

根 間 弘 海*

1. はじめに¹⁾

本稿では、大正末期の朱房行司のうち、木村玉治郎、木村林之助、式守与之吉の3名を対象にし、主として、次のことに焦点をあてる。

- (a) 木村玉治郎が朱房になったのは、いつか。
- (b) 木村林之助の軍配房は大正13年夏場所と大正14年春場所、何色だったか。
- (c) 式守与之吉が三役格になったのは、いつか。

これら3名は大正末期から昭和初期にかけて次のように改名している。

- (a) 木村玉治郎は大正15年春場所、木村庄三郎に改名している²⁾。後の19代式守伊之助である。
- (b) 木村林之助は大阪相撲では木村錦太夫を名乗っていたが³⁾、東京相撲に移ったときは木村林之助に改名している³⁾。番付に記載されたのは大正14年春場所だが、大正13年夏場所でもすでに名乗っている⁴⁾。
- (c) 式守与之吉は大正15年春場所、式守勘太夫に改名している。後の21代木村庄之助である。

*専修大学経営学部教授

拙稿「昭和初期の番付と房の色」(2009)と「大正時代の番付と房の色」(2010)でもこれらの行司については扱っている⁵⁾。しかし、その拙稿を発表した後で新たな資料が見つかったり、手元にあった資料を正しく理解していなかったりしていたことが分かり、以前の見方を変えなければならぬ点がいくつか生じた。本稿ではその変わった点を提示する。

2. 木村玉治郎

2.1 三つの昇格年月

19代式守伊之助は木村玉治郎を名乗っていた頃に、朱房に上がっているが、その昇格年月に関しては、次の三通りが見られる⁶⁾。

- (a) 大正14年春場所
- (b) 大正14年夏場所
- (c) 大正15年春場所

このうち、どれが真実を記しているだろうか⁷⁾。結論を先に述べれば、大正14年春場所が正しい。大正14年夏場所と大正15年春場所はいずれも間違いである。拙稿「昭和初期の番付と行司」(2009)では木村玉治郎が朱房になったのは大正15年春場所だと記述したが、それは誤りであった。拙稿「大正時代の番付と房の色」(2010)では大正14年春場所か夏場所かもしれないと訂正した。どの場所かを一つに断定することができなかった。拙著『大相撲行司の軍配房と土俵』(2012)の第8章「大正時代の番付と房の色」ではそれを修正してある。

それでは、もう少し具体的な文献を見て行くことにしよう。

(1) 大正14年春場所としている文献

(a) 『相撲』(S27.11-12)の「式守伊之助物語」

「大正2年春には、格足袋を許されて、十両格に出世致し、大正4年の夏には本足袋(幕内格)、14年春には朱房(三役格)と、順を追って進み、15年夏には木村庄三郎を襲名いたしました。」
(p.43)⁸⁾

(b) 『相撲』(S33.2)の「伊之助回顧録(3)」

「大富記者：まあ、本足袋から緋房になるまでというものは、なかなか年数が…。

伊之助： そう、長い。私の場合でも10年くらいかかっているでしょう。

大富記者： 9年ばかりですね。緋房になったのが大正14年の1月場所ですから。」(p.205)

これは大富という記者と伊之助の対談記事の一部である。

(c) 『軍配六十年』(S36)

「大正14年(1925年)39歳。春、三役格行司に昇進。11月に田中精一氏の妹田中ますえと結婚」(p.158)

この自叙伝では一貫して大正14年春場所に三役格になったと記述されている。

(2) 大正14年夏場所としている文献

(a) 『相撲の史跡(1)』

「大正2年5月十両格足袋に昇進，木村玉治郎と改名，ついで7年5月幕内格本足袋に躍進，14年5月には晴れて三役格に昇り，15年1月木村庄三郎を襲名した」(p.85)⁹⁾

これは生前の昭和36年12月に建立された墓碑に記されている。三役格になったのは，大正14年5月となっている。また，幕内格になったのも大正7年5月となっている。碑文は式守伊之助に確認しながら書いてあるはずだ。なぜ昇格年月が事実と異なっているのか，その理由は分からない。

(3) 大正15年春場所としている文献

(a) 山田著『相撲』(S35)

「金吾から玉次郎になったのは大正2年の春です。ここで十両になったのでタビをはくことになりました。そして4年の夏に幕内格で本タビ，同15年の春に三役格で緋房，その年の夏場所に庄三郎を襲名し，(中略)同22年春ぞうりをはけることになりました。さらに終戦後の22年春に副立行司に昇格，25年1月30日に19代式守伊之助を襲名致しました。(後略)」(p.197)

これは『いはらぎ新聞』に掲載されたものを引用してある。式守伊之助本人が記者の質問に答えている。大正15年春に三役格(朱房)になったというのは，伊之助の記憶違いである。さらに，副立行司と伊之助に昇格した年月も間違いである。というのは，副立行司になったのは昭和25年5月場所で，19代式守伊之助になったのは昭和26年9月だからである¹⁰⁾。

もまます無事にけりがついた（後略）」(p.110)

大阪行司の木村錦太夫は東京相撲では木村林之助と名乗っている。東京相撲に移ったとき、その地位をどこにするかでひと悶着があったが、結局、林之助は朱房行司とし、同時に東京行司の紅白行司を朱房に昇格させることにしている。江口筆の雑誌記事には具体的な行司名は示されていないが、当時の行司の地位から判断すると、玉治郎や誠道もその中に入っていたはずだ。林之助が玉治郎の上に据え置かれているし、誠道の免許が大正14年2月となっているからである。少なくとも玉治郎と誠道は大正13年5月まで紅白房だったことが分かる。朱房に昇格したのは5月場所後である。林之助は大正14年春場所から東京相撲の番付に載っている¹²⁾。玉治郎もその場所で晴れて朱房になったに違いない。

玉治郎が大正13年5月場所、紅白房だったのは、次の記事からでも分かる。

(c) 『大相撲』(S54.3)の「22代庄之助一代記(9)」

「私(木村林之助：NH)が幕内格のどんジリで、私のすぐ下が十両最上位の木村玉治郎だった。のちのいわゆる“ヒゲの伊之助”である。この人は(中略)明治33年夏場所、木村金吾の名乗りで初土俵を踏み、大正2年夏に玉治郎となった。このすぐ後の大正15年春、木村庄三郎を襲名して幕内格に上がり、昭和10年夏、三役格、26年秋19代式守伊之助となった。」(p.148)

林之助が語っているのが大正13年5月のことなのか、それとも大正14年1月のことなのかは必ずしも明確ではないが、おそらく大正13年5月のことである¹³⁾。東京相撲で軍配を裁いたのが大正13年5月場所だし、「幕内格」として扱ってもらったと一貫して語っているからである¹⁴⁾。林之助が

語る「幕内格」は「朱房行司」のことである。したがって、その幕内格より下の行司は「十両行司」である¹⁵⁾。玉治郎が「十両」の最上位だったと語っているのは、実は「紅白房」の上位という意味である。

3. 木村林之助

拙稿「昭和初期の番付と行司」(2009)では林之助は大正15年春場所か夏場所に三役格になったと記述してあるが、それは正しくない。また、拙稿「大正時代の番付と房の色」(2010)では林之助は大正14年春場所、朱房だった可能性が高いと記述してあるが、それは誠道の免許から推測したものであった。林之助の大阪相撲の房の色や大正13年春場所と夏場所の房の色については「紅白房」としてある。これも誤りである。

本稿では林之助は大阪相撲でも朱房の幕内格だったし、大正13年夏場所も朱房の幕内格として処遇されたことを指摘したい。

3.1 江口氏と池田氏の記事

大阪行司の木村錦太夫が大正13年春場所で東京行司として移ってきたとき、錦太夫の地位を巡って東京行司の間でひと悶着があった。その辺の事情を詳しく記してある雑誌記事がある。

- (a) 『野球界夏場所相撲号』(T13.5)の「名古屋の春場所を中心として」<江口福来筆>

「(前略)ちょうど今から3年前に、大阪で錦太夫と云った行司(朱房)が出羽の海部屋に来た。この男は相当に役に立つ男ではあるが、それだけに大阪協会でも容易に手放そうとはしなかった。そ

の他種々の事情から、東京の行司の仲間に入るわけにはゆかなくて、ただ、出羽の海部屋にいたのである。この男もようやく大阪協会の承諾を得たので、それから種々の事情も消滅したので、名古屋における本場所の前に東京協会に加入させてくれと、出羽の海部屋から協会幹部に申し出たのであり、取締たちもそれを承諾したのであった。ところで、そのあとから、朱房と紅白行司の仲間から、錦太夫（大阪から出た）の位置が出羽の海部屋の申し出の通りでは困るという抗議が出たので、それが紛擾化したわけである。

一体、大阪協会の行司というものは人数の少ないせいとか、出世が早い。東京ならば24、5年も行司をしていないと朱房にならないのであるのに、大阪では14、5年で朱房になれる。だから大阪の錦太夫なども東京の紅白行司の首席ほどの修業もしていないのであって、かつ東京の行司は従来東京大相撲のため相当に功労があったのに、これまで東京大相撲に何等の功労のない大阪の行司が突然やってきて自分たちの上にいるということは、東京の行司として我慢のできない話であるというのが、東京の若手行司の抗議の理由である。

この理由は理由だけとして聞いても一応もつともであるから—但しこの抗議の裏面にある事情が伏在していたという噂もあるが—取締以下の幹部員はその事情をもたらし、出羽ノ海に大阪の錦太夫の位置を紅白の二枚目にするこことしようとして交渉したのである。ところで出羽の海派では、一度協会幹部が朱房として付出すということを承諾しておきながら、若手行司の抗議にあうとたちまち前言をひるがえすというのは心得ぬことであるとして、容易にその交渉に応じなかった。このため、若手行司およびその後援者側からはまたも出羽海横暴が叫ばれ、井筒取締のごときは善後

策を考慮すべくひきこもることになり、ついには、責を負うて役員が総辞職するという話まで出た。そこで出羽の海も行司くらいのことから、大紛擾のやり直しをするでもあるまいと考える。大阪の錦太夫を朱房で付出すということはもちろんあくまでも主張するけれど、その付出しを5月場所とすること、そうして現在の紅白行司（東京の）首席あるいは次席あたりまでを春場所に出世させて朱房とすること、そうすれば春場所に紅白の二枚目に付出すよりもよからうという妥協案を出し、この紛擾の芽もまづまづ無事にけりがついた—と云っても、それが表面だけであるのはもちろんで、そのことがあってから、若手行司たちはそういう出羽海派と合同巡業するわけにはゆかないと主張し、折角できていた合同巡業のうち壊しをやった。（後略）」(pp.109-10)

これは大正13年2月20日に書いたということが記事の中で記されている。大正13年1月場所で林之助を幕内格で処遇しようとしたが、それに対して行司仲間から不満が出て、林之助は「幕内格」として了承されなかった。1月場所では一番も登場しなかったようだ。この記事によると、東京相撲に移る前、木村錦太夫は大阪相撲でも朱房の幕内格であった。この朱房は確かだが、池田氏は次の記事で見るように、それに疑義を唱えている。

- (b) 『大相撲画報』(S33.12)の「大相撲太平記(13)」<池田筆>
 「林之助は前記錦太夫のことであって、福来(江口氏:NH)の記事にはあきらかに誤りがある点に気づかないじゃいられない。すなわち錦太夫は大阪でも紅白(幕内)であって朱房(三役)じゃなかった。出羽海はもちろん紅白(幕内)として付出そうとしたのであり、幹部派もそれを了承したのだったが、それを知っておさまらなかつたのは紅白のなかにもいたであろうが、むしろ青

白（十両）の若手だったにちがいない。彼らとしてみれば錦太夫あらため林之助が一枚上へ付出されれば、順ぐり出世だから、それだけ自分たちの出世がおくれる勘定。いきまかずにはいられなかったであろう。（後略）」(p.43)

池田氏によると、林之助は大阪相撲でも紅白房だったし、協会幹部も紅白房の幕内格として処遇しようとしたとある。しかし、これは事実と反することが分かった。林之助は大阪相撲でも「朱房」の幕内格だったし、協会幹部も朱房の幕内格として処遇しようとしたのである。池田氏は「朱房」の幕内格ではなく、文字どおり「紅白房」の幕内格として解釈している。これは次の記事でも明らかである。

(c) 『大相撲画報』(S33.12)の「大相撲太平記(13)」<池田筆>¹⁷⁾

「池田： 何が動機で東京へくることになったの。」

林之助：ええ、そのまあ、東京へいけば天覧のときにも出られるしなあ、なんといっても東京の方が格式が上やで。どうせ行司になったんやから東京へいきとうなってな。大阪で25年もつとめてきたんやが、まあはやい話がそのころは、はあ、もう大阪はあかんようになっていたんで、見切りをつけましたんや。」

池田： 脱走したことになっているがほんとかね。」

林之助：そんなことあらへん。わしはちゃんと竹縄親方のゆるしをうけたんや。それから越後〔木村越後—大阪で名行司といわれ信望があつく、引退後も大阪協会の役員になって重用された人〕さんにも相談したんや。すると越後さんはそれがええ、お前なら東京へ行ってもやれるさかい、いきなはれ—と、まあ、励ましてくれた

ほどや。」

池田： 東京方への手づるは。

林之助：先代の立田川（伊之助）さんと懇意だったもんやで、あのかたに話して、出羽さんとこの秘書やった左門（行司木村左門—先々代立田川）さんにたのんましたんや。じゃ廃業しておいで—とひきうけてくれましてな。大正11年の5月廃業してしばらくぶらぶらしているうち、出羽（常陸山）さんは6月亡くなり、越後さんも7月—たしか7月亡くなられてな。わしはその年の11月新出羽さんとこへいってお世話になることになったんやが、しごとは書記ということな。それから満1年半後の13年夏場所付出されたんやが、幕内の一番シリでしたわ。」(p. 43)

拙稿「昭和初期の番付と行司」（2009）と「大正時代の番付と房の色」（2010）を執筆したころ、私は池田氏の記事が正しいと思っていた。そのため、林之助は東京相撲へ移った大正13年1月場所のころ、やはり「紅白房」だったに違いないと思っていた。しかし、それが誤りであることは後で分かった。大阪相撲でも林之助は朱房の幕内格であったことがいくつかの資料から確認できたのである。

3.2 大阪相撲の番付と木村錦太夫

林之助は大正11年1月場所後に大阪行司を辞めたので、大正11年5月場所の大阪番付からは消えていると述べている（『行司と呼出し』(p. 47)）が、これは正しくない。というのは、大正12年1月場所の番付にも記載されているからである。

(a) 11年5月場所¹⁸⁾

- 一段目：木村玉之助，岩井正朝，木村清之助
 二段目：岩井房之助，木村錦太夫，木村相之助，木村誠道，
 木村玉光
 三段目：木村喜三郎，木村正直

木村錦太夫はこの場所，第5席である。大阪相撲の番付でも席順だけでは房の色を判断することはできない。

(b) 12年1月場所

- 一段目：木村玉之助，岩井正朝，木村清之助，
 二段目：岩井房之助，木村錦太夫，木村相之助，木村誠道，
 木村玉光，木村喜三郎
 三段目：木村正直，木村正次

木村喜三郎はこの場所，第8席で朱房になっている(小池(191)，p.135)。このことから大正11年5月場所，錦太夫は朱房だったことが推測できる。第8席が朱房ならその4枚上の第5席も朱房であることは自然だからである。つまり，錦太夫は東京相撲に移る前，大阪相撲でもすでに朱房だったのである。木村喜三郎に関しては，次のような記述がある。

・『相撲』(H17.5)の小池氏「年寄名跡の代々(191)―千田川代々の巻き(5)」

「(木村喜三郎は：NH)大正5年1月数え24歳(満22歳)で幕内格に昇格。千田川部屋内では，代替わりした師匠の下で書記・会計役を務めた。大正12年1月に数え31歳(満29歳)で幕内上位格(緋房格)となったが，同年5月場所前に起こった「龍神事件」のために

師匠の千田川及び21力士が角界を去ったため、彼が千田川の跡目と部屋
の建物、残された弟子たちを引き受け、同年6月限りで引退して、
頭取千田川を襲名するのであった。」(p.135)

木村錦太夫は大正11年夏場所後で大阪相撲を離れているが、格下だった
木村喜三郎がその1年後の大正12年1月場所で朱房になっている。木村林
之助も間違いなく、大正11年夏場所までは朱房だったはずだ。

(c) 12年5月場所

一段目：木村玉之助，岩井正朝，木村清之助，

二段目：岩井房之助，木村相之助，木村誠道，木村玉光，木
村喜三郎

三段目：木村正直，木村正次

この場所で錦太夫は番付から消えている。

池田氏が雑誌記事の中で木村錦太夫は大阪相撲でも紅白房だったと述べて
いるのは、おそらく、二つの理由による。

(a) 木村林之助本人が一貫して「幕内格」として処遇されたと語って
いる。林之助とも直接会い、地位について確かめているが、やはり
「幕内格」だったと本人が語っている。私の知る限り、林之助
はどの文献でも大正末期の自分の房の色に関してはまったく触れ
ていない。地位が「幕内格」だったと語っているのは多いが、ど
ういうわけか房の色に関しては語っていないのである。

(b) 幕内格は紅白房であるとするのが一般的である。しかし、大正末
期までは草履を履かない朱房行司は規定上「幕内格」だった。紅

白房も本足袋で、「幕内格」だった。両者の区別があいまいだったため、池田氏は林之助の語る「幕内格」を紅白房と解釈したようだ。大正末期の「幕内格」は朱房の場合もあるし、紅白房の場合もある。それを確認しなければ、誤解を生むことになる¹⁹⁾。昭和2年春場所以降であれば、朱房と三役格、紅白房と幕内格のように、房の色と地位が大体対応している。

3.3 大正13年5月場所と林之助

林之助が東京相撲で実際に裁くようになったのは、大正13年5月場所である²⁰⁾。これは次の新聞記事でも確認できる。

(a) 『朝日』(T13.5.18)の「行司に椅子やれ」

「行司が行司をされたという珍談がある。事の起りは大阪に20余年と苦節を積んで幕内格に漕ぎつけた木村林之助という行司、感ずることあって3年前に東京方に脱走して出羽ノ海の厄介になっていた。

ところが、出羽ノ海は突然この場所から林之助を幕内格として国技館に登場させることにしたので、東京の同格行司は納まらず『出羽横暴』を唱えて27名の仲間^{いきま}は初日に出ないと敦闘いた。

これを聞いた某年寄、ソレは大変と仲に入って漸く丸く納め、林之助は2日目から初登場した。その林之助を見ると容姿といい、捌き方といい、なかなか立派だ。出羽の遣り方も強すぎたかも知れないが、行司さん方もあまり目に角たてるとヤキモチに見られる。(後略)」

この場所では「幕内格」として2日目から登場している²¹⁾。林之助が「朱

房」の幕内だったことは次の記事でも確認できるが、これは平成3年に書かれていることから分かるように、房の色に関してはそれを確認できる確実な資料とは言えない。

(b) 『大相撲』(H3.1)の「私の見た大正末期の大相撲(5)」

「この場所(大正13年5月場所:NH)、以前から出羽海を頼って上京していた大阪相撲の朱房(三役格)行司木村錦太夫が登場した。

錦太夫は大正12年1月の大阪番付で、木村玉之助、木村清之助、岩井房之助、岩井正朝に次ぐ地位にあり、名古屋場所から出場させようとしたが、東京の朱房、紅白(幕内格)の行司連の抗議でとりやめになっている。理由は、大阪相撲の行司は人数が少なく出世が早いので、十両格の木村玉治郎、木村誠道、木村善之助より年下であり、年功序列の行司にとって、若い者が割り込んでくるのに反対したのである。

しかし、軍扇さばきもよく、この場所幕内格のしりに付出し、木村林之助として念願の東京場所に出るようになった。番付面では大正14年1月場所からである。」(p.94-5)

大正13年5月場所になっても林之助の処遇を巡る不平不満はまだ収まっていなかった。この場所では、木村玉治郎や木村誠道はまだ「紅白房」である²²⁾。この行司たちが「朱房」として処遇されたのは、翌場所つまり大正14年1月場所である。

木村林之助本人が「幕内」のドン尻に付出されたと言っているのは、おそらく、大正13年夏場所のことで、大正14年春場所のことではない。というのは、木村玉治郎と木村誠道は大正13年5月、紅白房だったが、大正14年1月場所は朱房だったからである。林之助は朱房行司を「幕内格」、そ

れに紅白房を「十両格」と呼んでいる。木村玉治郎は大正13年5月、紅白房だった。本来なら、玉治郎は「幕内格」だが、林之助はどういうわけか「十両格」と呼んでいるのである。この呼び方が正しいのかどうかは定かでない。私の理解する限り、紅白房の行司を「十両格」と呼ぶのは一般的でない²³⁾。

(c) 『大相撲太平記 (13)』 (S33.12)

「先代の立田川（伊之助）さんと懇意だったもんやで、あのかたに話して、出羽さんとこの秘書やった左門（行司木村左門—先々代立田川）さんにたのんましたんや。じゃあ廃業しておいで—とひきうけてくれましてな。大正11年の5月廃業してしばらくぶらぶらしているうち、出羽（常陸山）さんは6月亡くなり、越後さんも7月—確か7月亡くなられてな。わしはその年の11月新出羽さんそこへ行ってお世話になることになったんやが、しごとは書記ということな。それから満1年後の13年夏場所付出されたんやが、幕内の一番シリでしたわ」 (p.43)

林之助が東京相撲に初めて登場したのは、大正13年春場所だったという記事があるが、これはどうやら林之助の記憶違いによるものらしい²⁴⁾。

(d) 「22代庄之助一代記 (6)」

「大正13年の春場所は、とりあえず土俵を名古屋に移して決行ときまり、中区の大池町の空地に仮設国技館が建った。この場所、ようやく、私の位置が決まった。私の新しい名前は木村林之助。番付は幕内のドン尻。だが、私は涙が出るほど嬉しかった。大阪の幕内が、東京でも幕内格であつかつて頂けたのである。」 (p.140)²⁵⁾。

林之助は名古屋に同道していたが、土俵には上がらなかったようだ。行司仲間の同意が得られていなかった。軍配を初めて裁いたのは大正13年春場所ではなく、翌夏場所だったと後で訂正しているが、春場所も名古屋で滞在していた。林之助を巡る問題は、大正13年夏場所も解決していなかったらしく、番付には記載されていない。番付に記載されるようになったのは、大正14年春場所である。これは新聞記事でも確認できる。

(e) 『都』(T14.1.6)

「行司に大阪より脱退した木村林之助が足袋行司につけ出された」

この「足袋行司」はおそらく「本足袋」のことである。林之助も自伝『行司と呼出し』(S32)などで「幕内格」として処遇されたと語っている。

(f) 「22代庄之助一代記(6)」(S53.8)

「大阪の幕内が、東京でも同じ幕内格であつてもらえたのである」(p.140)

大阪相撲の番付で確認したように、林之助はそこで朱房の幕内格であった。東京相撲でも朱房の幕内格として処遇され、喜んでいる。

4. 式守与之吉

拙稿「大正時代の番付と房の色」(2010)では、与之吉が朱房になった年月を資料で確認できなかったため、大正14年1月まで「紅白房」として扱っている。しかし、拙著『大相撲行司の軍配房と土俵』(2012)の第8

章「大正時代の番付と房の色」では、大正11年夏場所に「朱房」になったことを指摘し、そのように修正してある²⁶⁾。本稿で問題にしているのは、朱房になった年月ではなく、三役格になったのがいつかということである。これまで見てきたように、朱房でありながら幕内格の場合もあったからである。与之吉の三役格昇格年月に関しては、次の三通りが見られる。

- (a) 大正15年 1月
- (b) 昭和 2年春場所
- (c) 昭和 2年夏場所

この3つのうちで、どれが正しいかと言えば、おそらく昭和2年春場所か夏場所である²⁷⁾。昭和2年春場所では「幕内格」だったが、実質的には「三役格」扱いだったかもしれない。というのは、その場所でも朱房を使用しているからである。昭和2年春場所以降は、三役格の房の色は「朱」だったが、夏場所で正式に「三役格」になったようだ。昭和2年春場所では一枚上の与太夫だけが「三役格」になり、夏場所で勘太夫も「三役格」になったことになる。

4.1 大正15年1月の三役格

大正15年1月に三役格になったとしている文献には、たとえば、与之吉本人の自伝『ハッケヨイ人生』がある。

- (a) 21代木村庄之助著『ハッケヨイ人生』(S41)

「明治45年、すなわち大正元年に兵隊から帰ってきて、大正2年に十両になりました。その十両も2年そこそこで、すぐ5年から幕内格になりました。幕内の軍配の房は紅白ですが、その紅白の

房を持ったのは10年ほどではなかったかと思っています。そして大正15年1月に三役となり、勘太夫と名前もかわって朱房の軍配を持つことになりました。」(pp. 76-7)

ここで述べてある年月に関しては、すべてが必ずしも正しくない²⁸⁾。大正15年1月に朱房になったと語っているが、これは正しくない。また、朱房になったのと同時に「三役格」にもなっているが、これも正しくない。なぜこのようなミスが二つ重なっているかは必ずしも定かでない。さらに、次の点もまだ解明されていない。

- (i) 紅白房になったのは大正5年で、それが大正15年1月頃まで続いていたことである。しかし、実際は、大正11年夏場所に朱房になっている。
- (ii) 大正15年1月に紅白房から朱房になり、同時に三役にもなっていることである。しかし、三役格になったことを裏付ける証拠はない。一枚上の与太夫が大正15年ごろまでに三役格になっていれば、与之吉が大正15年1月に三役格になっても不思議ではない。与太夫は昭和2年春場所に三役格になっている。

もし、与之吉改め勘太夫(のちの21代庄之助)が述べているように、大正15年1月に三役格になっていたのであれば、一枚上の与太夫もそれ以前に三役格になっていたはずだ。しかし、それを裏付ける証拠はない。そうすると、与之吉は何かを勘違いしていたことになる。21代庄之助の自伝『ハッケヨイ人生』(S41)の他に、勘太夫が大正15年1月、三役格になったとしている文献には『相撲の史跡(3)』がある。

(b) 『相撲の史跡 (3)』

「大正15年1月勘太夫襲名, 三役格にすすみ, (後略)」(p. 151)

これが何に基づいているかは分からない²⁹⁾。

4.2 昭和2年春場所と三役格

・『大相撲夏場所号』(S2.5)の「相撲界秘記」

「(前略) 西の海の組合は, 朱房の勘太夫が, 特に地方だけの紫白行司になって—こうした例は, 今の伊之助が錦太夫時代にもありましたが—参加しますし, 能代潟の組合は, 青白行司の要人が, 特に朱房草履の行司になって, 参加しています」(p. 122)

この記事は春場所後の巡業中に書かれている。巡業中に朱房を使用していることから, 春場所でも朱房を使用していたはずだ。もちろん, 春場所後に朱房になったという推測をすることもできるが, それは正しくない。理由は少なくとも三つある。

- (a) 勘太夫は春場所直後の巡業で朱房を使用している。春場所でも朱房だった可能性が高い。春場所ではなく, その後に朱房になったとすれば, 春場所では紅白房だったことになる。しかし, それを裏付ける証拠はない。
- (b) 要人が青白行司だということを正しく記述している。この行司は春場所, 紅白房から青白房に降格されている。要人が降格し, 青白房になっていることを正しく理解していることから, 勘太夫が朱房であることも正しく理解していると判断してよい。

- (c) 巡業組の相撲部屋の組み合わせを正しく捉えているだけでなく、行司の世界に関する知識が豊かである。特に大阪相撲から移ってきた木村清之助や木村玉之助の処遇にも精通している。

すなわち、勘太夫は春場所、朱房だった。昭和2年春場所以降は、基本的に、朱房は三役格を意味しているが、勘太夫の朱房が直ちに三役格を意味しているかどうかは必ずしも確かでない。もしかすると、幕内格であるにもかかわらず、何らかの理由で朱房を元のまま継続して使用したかもしれない。勘太夫は夏場所で三役格に昇格することが口頭で伝えられていたかもしれない。しかも、当時は東京相撲と大阪相撲の合併で現場が混乱していた可能性がある。

勘太夫（つまり与之吉）が昭和2年春場所、三役格に昇進したとする文献としては、たとえば『大相撲』(H6.6)の「立行司になるまで」(p.136)がある。これは立行司になるまでの年月を調べるための記事である。21代木村庄之助（つまり勘太夫）が三役格になった年月を昭和2年春場所だとして記してあるだけである。この記事ではその年月が正しいかどうかを確認できない。

4.3 昭和2年夏場所の三役格

- (a) 「22代庄之助一代記(9)」(S54.3)

21代木村庄之助の行司歴を羅列し、その中で勘太夫が昭和2年夏場所、三役格になったことを述べている (p.147)

この他には、たとえば、『近世日本相撲史(2)』(p.9)や「22代庄之助一代記(10)」(S54.5)などがある。

勘太夫が昭和2年夏場所、三役格になったことを裏付ける証拠はまだ見えていない。文献では昇格年月を記してあるが、それが事実なのかどうか分からない。

もし勘太夫が昭和2年夏場所、三役格になったのであれば、解決しなければならない問題が一つある。それは春場所、どの色の房を使用していたかということである。これに関しては、二つの可能性がある。

- (i) 先にも述べたように、軍配房が朱色だったならば、なぜそれを用いたかである。三役格ではないのだから、紅白房を使用するのが自然である。それにもかかわらず、朱房を使用していた。
- (ii) 春場所は朱房を用いたのではない。使用したのは、幕内格の紅白房である。これが取るべき本来の姿だが、実際はそのようになっていない。もし春場所に紅白房を用いたならば、夏場所にはそれを朱房に変えなければならない。しかし、そのように房を変えたという文献を今までに見たことがない。もし夏場所で紅白房から朱房に変えたのだとすれば、勘太夫が春場所に朱房を使用したという記事は間違っていたことになる。しかし、それが間違っていたことを証明する資料はまだ見たことがない。

この二つの中でいずれか一つを選ぶとすれば、やはり春場所の朱房である。理由は不明だが、勘太夫は春場所、朱房を使用していたに違いない。問題は、勘太夫が同時に三役格になったかどうかである。これに関しては、先に触れたように、定かでない。夏場所に三役格になったのが正しければ、春場所は何らかの理由で朱房を継続して使用したに違いない³⁰⁾。本稿では、勘太夫は春場所、「幕内格」で朱房を使用し、夏場所で「三役格」になったとする立場である。

このように見てくると、昭和2年春場所と夏場所の番付と房の色は次のようになる。

(a) 昭和2年春場所

一段目：「紫」庄之助／「紫白」伊之助，玉之助

二段目：「朱」清之助，（錦太夫改）与太夫／「朱」勘太夫，
「紅白」林之助，玉光

三段目：「紅白」庄三郎，誠道，正直／「青白」要人，善之
輔／光之助，政治郎

この番付は「22代庄之助一代記（10）」（p.144）で示されている番付と同じである。三役格は木村清之助と式守与太夫の二人である。式守勘太夫は幕内格筆頭である。房の色だけを見ると、勘太夫は清之助や与太夫と同じ「朱房」の部として扱いたくなる。しかし、勘太夫を朱房の幕内格筆頭とする限り、他の幕内格と同様に扱わなければならない。

(b) 昭和2年春場所

一段目：「紫」庄之助／「紫白」伊之助，玉之助

二段目：「朱」清之助，与太夫，勘太夫／「紅白」林之助，
玉光

三段目：「紅白」庄三郎，誠道，正直／「青白」要人，善之
輔，光之助，政治郎

この番付では勘太夫が他の三役格（つまり朱房）と同じ仲間として分類されている。結果的に、すっきりした形である。

なお、勘太夫が三役格になった年月に関しては、次のような記事もある。

(a) 『国技大相撲』(S16.5)

「昭和2年朱房を許されて三役行司となり、同13年1月玉之助を襲って紫白の房を許されて立行司に列せられ、翌14年1月式守宗家伊之助を継ぎ、翌15年5月には木村庄之助となって…。」

(p.33)

この記事には「昭和2年」と記述してある。残念なことに、春場所と夏場所のうち何れなのか、肝心な場所を特定できない。この記事で分かることは、勘太夫は確かに昭和2年中に三役格になったことである。この昭和2年が正しければ、21代庄之助の自伝『ハッケヨイ人生』で語っているように、大正15年1月に三役格になったという年月は真実でないことになる。

4.4 朱房の足もと

朱房の幕内格は大正末期、草履を履いていない。これは、たとえば、「夏場所相撲号」(T15.5)の口絵で確認できる。

(a) 能代潟と出羽ヶ嶽の取組

鶴之助は足袋だけで、草履を履いていない。鶴之助は勘太夫より三枚上である。従って、勘太夫は草履を履いていない。

(b) 若葉山と出羽ヶ嶽の取組

錦太夫は足袋だけで、草履を履いていない。錦太夫は勘太夫より二枚上である。

(c) 出羽ヶ嶽と真砂石の取組

誠道は足袋だけで、草履を履いていない。誠道は勘太夫より下位

の行司なので、草履を履かない。

(d) 玉錦と大蛇山の取組

行司は「与之吉改め勘太夫」とあるが、足元は不鮮明である。足袋だけなのか、草履を履いているのかは分からない。しかし、勘太夫は鶴之助や錦太夫より下位なので、足袋だけだと判断して間違いない。

このように見てくると、勘太夫が大正15年1月に「三役格」になっていたとしても、草履を履けなかったことになる。つまり、大正末期には三役格になっても、草履を履いていない。それでは、朱房の幕内格とその「三役格」はどのように区別したのだろうか³¹⁾。少なくとも「草履」はそれを区別する要素にはなっていない。

大正時代には、朱房の草履は木村大蔵が最後である。大蔵に続く庄三郎、瀬平、左門は草履を履く前に行司を辞めている。鶴之助は大正15年1月場所も足袋だけである。どうやら大正10年5月場所あたりで、朱房の草履はいなくなっている。与太夫、勘太夫、錦太夫、大蔵は大正10年1月場所、関脇格であり、草履を履いていた。軍配房は朱色である(『夏場所相撲号』(T10.5))。

昭和2年春場所以降は、三役格でも草履を履いていない³²⁾。それを端的に示すのは、大阪相撲から移ってきた木村清之助である。清之助は大阪相撲では紫白房の立行司だったが、東京相撲では三役格に降格され、草履を剥奪されている。従って、式守勘太夫が昭和2年春場所か夏場所に三役格になっていたとしても、草履を履いているかどうかではその見分けがつかない。三役格であっても草履を履いていなかったからである。

5. おわりに

本稿では、大正末期から昭和初期にかけて行司を務めた式守勘太夫、木村林之助、木村玉治郎の3名に焦点を当て、その地位や軍配房の色について詳しく調べてきた。その結果、大体次のことが分かった。

- (a) 木村玉治郎が朱房になったのは大正14年1月である。一枚下の木村誠道の免許が決めてである。同時に、木村林之助を朱房の幕内格として処遇することがきっかけになり、木村玉治郎や木村誠道を「朱房」に格上げすることになった。
- (b) 木村林之助は東京相撲に移ったとき、朱房の幕内格として処遇されている。池田氏によれば、林之助は「紅白房」の幕内格だったが、実は、そうではなかったことが当時の雑誌記事から分かった。林之助は大阪相撲でも朱房の幕内格だった。それは木村喜三郎の朱房から推測できる。
- (c) 式守与之吉は自伝『ハッケヨイ人生』で大正15年1月場所から三役格になったと記述してあるが、それを裏付ける他の証拠はない。朱房の幕内格になったのも大正11年夏場所である。与之吉がどの場所から三役格になったのかに関しては、本稿でも断定できない。正式な三役格になったのが昭和2年夏場所であれば、昭和2年春場所は「実質的な」三役格として処遇されていた可能性が高い。その場所でも朱房を使用していたからである。昭和2年春場所には朱房は三役格である。三役格でない行司が朱房を許されていたとすれば、そうする何らかの理由があったか、三役格を暗黙のうちに認めていたことになる。

本稿では、与之吉がいつ三役格になったのかに関しては、確かな年月を提示できなかった。残念ながら、確かな裏付けとなる資料が手元にないのである。どちらかと言えば、昭和2年夏場所だとする文献が多いが、その年月が何に基づいているのかがはっきりしない。昭和初期の資料であれば、信ぴょう性もそれだけ高くなるが、文献はほとんどすべて昭和30年以降に公刊されたものである。与之吉自身の自伝『ハッケヨイ人生』では三役格になったのが大正15年1月だったと述べられているが、それを裏付ける根拠がかなり薄いのである。これが真実なら、昭和2年春場所か夏場所の「三役格」は二度目の昇格となるはずだ。そうすると、一枚上の与太夫が昭和2年春場所で三役格になったのも、2度目の昇格ということになる。与太夫の三役格に関し、このような考えを述べた文献は見つけない。このように、与之吉の三役格を巡っては、まだ分からないことがいくつかある。本稿で解明できなかった点は、今後の課題として残しておきたい。

本稿では、木村林之助と木村庄三郎が昭和2年春場所、どの房の色を使用したかについて何も述べていない。この両行司はその場所、朱房の幕内格から紅白房の幕内格に降格されている。従って、本来であれば、紅白房を使用したはずである。昭和2年春場所に地位と房の色が一致するようになったからである。しかし、両行司の紅白房を裏付ける資料は見つけない。昭和5年夏場所は確かに紅白房だったが、それ以前の房の色については確たる証拠がないのである。

もし林之助と庄三郎が昭和2年春場所、勘太夫の朱房と異なり、紅白房を使用したのであれば、勘太夫の朱房は、本稿で述べたように、やはり例外的な扱いである。しかし、この両行司が勘太夫と同様に「朱房」を使用していたならば、勘太夫の朱房も見直さなければならなくなる。大正15年5月場所で朱房だった行司は昭和2年春場所でも例外的に朱房を許されたことになり、勘太夫だけが特別に処遇されたことにはならないからである。

昭和2年春場所、木村清之助や要人は地位が降下されたために、それに

応じて房の色も変えている。また、十両行司から幕下行司に降下された行司も何名かいたが、やはり房の色を変えたことは新聞記事でも確認できる（『都』(S2.1.8)）。このような事例があることから、本稿では朱房だった木村林之助と庄三郎は共に紅白房を使用したという前提に立っている。その前提が覆るようであれば、行司の地位と房の色は昭和2年春場所では必ずしも一致しなかったことになる。また、例外的に朱房を使用したのであれば、なぜそうしたかを吟味しなければならない。

注

- 1) 大阪相撲の番付に関しては、大阪在住の藤原英也氏にお世話になった。藤原氏はすもう瓦版『土俵』を発行している斎藤健治氏に紹介してもらった。奈良県葛城市相撲館（けはや座）の小池弘悌氏には雑誌記事のコピーでお世話になった。21代木村庄之助と一緒に行司を務めていた29代木村庄之助にも三役格のことについて尋ねたりした。本稿をまとめる際に直接、間接にご協力いただいた方々にここに改めて感謝の意を表したい。
- 2) 玉治郎を庄三郎に改名したのは春場所である（『読売』/『時事』（T15.1.6)）。番付でも春場所になっている。しかし、自伝『軍配六十年』（p.158）や山田著『相撲』（p.197）では夏場所になっている。やはり番付が正しい。昇格や改名の年月に関しては、自伝であろうとなかろうと、一場所や一年のズレはよくある。協会で決めた年月や正式な免許の交付日のズレ、あるいは記憶違いなどがあるからである。
- 3) 木村錦太夫を名乗ったのは明治44年2月で、明治45年1月に幕内格（紅白房）に昇格している（『22代庄之助一代記（4）』（p.118)）。
- 4) 大正13年春場所は名古屋で開催され、錦太夫も同道していたようだ。錦太夫は当時、すでに林之助に改名することを決めていたに違いない。
- 5) 拙稿「昭和初期の番付と房の色」（2009）は拙著『大相撲行司の軍配房と土俵』（専修大学出版局、2012）の第8章として収録されているが、内容に修正が少し加えられている。
- 6) 19代式守伊之助は木村庄三郎を名乗っていた昭和2年春場所、朱房から紅白房に降格されている。二度目の朱房昇格は昭和10年5月である。本稿で扱っている朱房の昇格年月は一度目のものである。
- 7) 19代式守伊之助は朱房行司を「三役格」として捉えている。しかし、厳密にはこれは正しくない。大正末期には草履を履かない朱房行司は「幕内格」だった。朱房行司が三役格とみなされたのは昭和2年春場所以降である。相撲の寄附行為にそれが明記されたのは昭和14年5月である（第24条）。朱房行司の階級としての位

置づけに関しては、たとえば拙稿「草履の朱房行司と無草履の朱房行司」(2010)に詳しく扱っている。

- 8) 玉治郎が庄三郎に改名したのは15年夏ではなく、15年春である。
- 9) 木村玉治郎が幕内格に昇進したのは、大正4年夏場所である(『やまと』(T4.6.11))。免許状の日付は大正4年11月となっている。免許状は『軍配六十年』の「伊之助思い出のアルバム」の項で見ることができる。
- 10) 両国国技館の行司部屋に所蔵されている非公開資料によると、庄三郎は昭和26年夏場所、副立行司に格上げされている。
- 11) 拙稿「大正時代の番付と房の色」(2010)では、免許状が2月付になっていることから春場所後に出されたかもしれないということで、誠道や玉治郎の「朱房」は夏場所の可能性もまったく否定できなかった。そのため、両行司の朱房は春場所か夏場所というあいまいな記述になっていた。しかし、林之助の朱房が大正13年夏場所だったことが分かり、玉治郎と誠道の朱房もその翌場所の大正14年春場所だと確定することができた。
- 12) 木村林之助は大正13年5月にも取組を裁いているが、その場所の軍配房が何色だったかははっきりしない。林之助は「幕内格」として扱ってもらったと語っていることから判断すると、使用した軍配房は「朱」だったようだ。というのは、林之助は「朱房」を「幕内格」と同義で使用しているからである。
- 13) 『大相撲画報』の「大相撲太平記(13)」(S33.12)では「(大正：NH)13年夏場所で付出されたんやが、幕内の一番シリでしたわ」(p.43)と語っている。これから察すると、大正13年春場所にはまだ受け入れられておらず、土俵裁きもしていないはずだ。しかし、当時、林之助の地位をどうするかは協会と行司のあいだで討議していたに違いない。
- 14) 林之助は東京相撲で「幕内格」として扱ってもらったということをししばしば語っているが、私の知る限り、房の色については触れていない。林之助が「幕内格」だったと語る場合、それは「朱房」のことである。一般的に理解されている「紅白房」のことではない。その幕内格を「紅白房」だと捉えてしまうと、地位に関して間違った解釈をしてしまうことになる。実は、拙稿「昭和初期の番付と行司」(2009)を執筆していた頃は、そのように誤解していた。そのため、その稿では林之助は紅白房として記述している。それはミスだったのである。
- 15) 大正末期まで草履を履かない朱房行司は正式には「幕内格」だが、林之助が語っているように、紅白房の行司を「十両格」と呼ぶことがあったかどうかは分からない。青白房の行司を「幕下格」という呼び方は明治中期まではあったが、明治後期には足袋格というのが普通だった。林之助の「幕内格」や「十両格」という呼称は一般的でないので、彼がこの呼称を使うときはどの地位の行司を指しているかに特に注意しなければならない。玉治郎は大正13年春場所です房になるまで、紅白房の本足袋であり、従って幕内格だった。決して青白房の十両格ではなかつ

たのである。

- 16) この記事の抜粋は『大相撲画報』(S33.12)の「大相撲太平記(13)」(p.43)にも掲載されている。
- 17) 池田氏は昭和33年11月、九州本場所の14日目、林之助に会って直に尋ねている。
- 18) 四角括弧で囲んでるのはポイントになっている行司を表す。
- 19) 実際、19代式守伊之助も大正末期に朱房になったことを「三役格」になったと語っている。21代木村庄之助も朱房と三役格を同義に解釈している節がある。大正末期の朱房は必ずしも三役格を意味しない。
- 20) 大正13年5月場所の番付には記載されていない。林之助の登場をどのように表示したかは分からない。取組表らしきものに地位や行司名が書いてあるかもしれないが、残念ながら、そのような資料をまだ見ていない。
- 21) 林之助が2日目から登場したことは、『朝日』(T13.5.18)の「国技館大相撲」の項でも確認できる。
- 22) 木村玉治郎や木村誠道以外にこの場所、朱房に昇格した行司がいたかどうかははっきりしない。また、本稿では、木村林之助の朱房待遇を巡る騒動を取めるために玉治郎や誠道を朱房にしたと解釈しているが、それが正しい解釈かどうかは必ずしも定かでない。木村林之助とは全く関係なくこの昇格人事が行われたかも知れないからである。はっきりしないことは、当時、人事を進める基準がどうなっていたかが分からないことである。
- 23) 林之助が木村玉治郎を「十両格」と呼んでいることには、別の意味があるかもしれない。大正13年5月には玉治郎が紅白房の幕内格であることは、疑いのない事実だったからである。
- 24) 「22代庄之助一代記(6)」(S53.8, p.140)では大正13年春場所となっているが、「22代庄之助一代記(9)」(S54.3, p.146)では大正14年夏場所だったと修正している。22代木村庄之助と前原太郎共著『行司と呼出し』(S32, p.48)／『大相撲』(H6.6)の「名行司22代庄之助104歳の大往生」(p.129)でも東京相撲に初登場したのは大正13年春場所となっている。林之助は名古屋場所に同道し、そこで軍配裁きをするつもりだったに違いない。しかし、結果的にはその春場所に登場できなかった。
- 25) これと同じ内容の記述は22代木村庄之助・前原太郎共著『行司と呼出し』(p.49)にもある。
- 26) 式守与之吉が紅白房から朱房になったのは、大正11年夏場所である(たとえば「22代庄之助一代記(9)」(p.147))。この文献ではその年に「幕内格」に昇格したと記述されているが、これは「朱房」になったことを意味しているに違いない。『大相撲人物大事典』(p.689)でも与之吉は大正11年夏場所で「幕内格」になったと記述している。大正11年春場所には実質的に朱房だった可能性もあるが、それを裏付ける資料はまだ見つかっていない。与之吉が紅白房(つまり幕内格)になっ

たのは、大正4年春場所である。

- 27) 昭和5年夏場所以降の行司の地位や房の色に関してはそれを確認できる資料が存在するが、その資料には昭和2年春場所から昭和5年春場所までの記録が欠けている。そのため、その間の行司の地位や房の色を調べるとなると、他の資料に当らなければならない。昭和2年春場所から昭和5年春場所までの行司の地位や房の色に関しては拙稿「大正時代の番付と房の色」(2010)、それから昭和5年夏場所以降のそれに関しては拙稿「昭和初期の番付と行司」(2009)で詳しく扱っている。
- 28) 与之吉が幕内格になったのは大正5年ではない。幕内格に昇格したのは大正3年5月場所九日目である(小池(40), p.157)。二枚下の玉治郎が紅白房に昇進したのは大正4年夏場所7日目である(『やまと』(T4.6.11)。与之吉が幕内格に昇進した年月が玉治郎より遅くなることはない。大正4年頃の与之吉と玉治郎の番付と軍配房に関しては拙稿「大正時代の番付と房の色」(2010)にも詳しく扱っている。なお、『大相撲』(H13, p.267)には玉治郎は大正7年5月場所で幕内格になっている。この年月は紅白房の幕内格の昇進を意味しているはずだが、正しくない。
- 29) 『大相撲力士名鑑』(H13, p.267)でも与之吉は大正11年5月場所で幕内格になっている。これは「朱房」の幕内格になったことを意味しているに違いない。玉治郎が幕内格に昇進した年月を大正7年1月場所としてあることから、与之吉が玉治郎より後に紅白房の幕内格になることはない。この『大相撲力士名鑑』(H13)では房の色の言及がないので、どの幕内格を指しているかがはっきりしない。与之吉も玉治郎も同じ「幕内格」としているが、この両力士の房の色は違ってははずだ。
- 30) 大正11年5月場所で朱房になった与之吉は大正15年5月場所でも房の色はやはり「朱」だった。
- 31) 大正末期の頃、三役格が草履を履いていなかったとすれば、朱房の幕内格とどのように区別したのだろうか。これは興味をそそる問題だが、本稿ではそれにまったく立ち入っていない。
- 32) 昭和以降の三役格と草履については、拙稿「草履の朱房行司と無草履の朱房行司」(2010)に詳しく扱ってある。相撲の本や雑誌などで「三役格は草履を履き、短刀を差す」という表現がされているが、これは昭和2年春場所から昭和22年までは当てはまらない。

参考文献

月刊誌、機関誌、新聞等は本文の中で必要な事項は記してあるので、ここでは書籍のみを記す。

木村庄之助（22代）・前原太郎，昭和32年，『行司と呼出し』，ベースボール・マガジン社。

木村庄之助（21代），昭和41年，『ハッケヨイ人生』，帝都日日新聞社。

『近世日本相撲史』（1～5），日本相撲協会博物館運営委員会（監），昭和50年～昭和56年，ベースボール・マガジン社。

式守伊之助（19代），昭和36年，『軍配六十年』，高橋金太郎（発行者）。

根間弘海，平成22年（2010），『大相撲行司の伝統と変化』，専修大学出版局。

根間弘海，平成23年（2011），『大相撲行司の世界』，吉川弘文館。

根間弘海，平成24年（2012），『大相撲行司の軍配房と土俵』，専修大学出版局。

山田野理夫，昭和35年，『相撲』，ダヴィッド社。